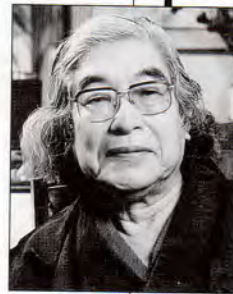


近藤芳美百首

道浦母都子 選



近藤芳美

聖書が欲しとふと思ひたるはずみよりとめどなく泪出でて来にけり

人を恋ふる宵々なりきつづけさまに唯物論全書買ひ来ては読みぬ

『早春歌』

ほしいままに生きしジュリアンソレルを憎みしは吾が体質の故もあるべし

指さして人をののしりたりしさへ夢の如しもよべの記憶に

製図台に胸押しつけて線引けば幾度もゴムを床に落せり

この夕べかまきりの子は幾匹も屋上園の芝に生れ居き

兵となり満洲に行きたしと言ふ友よかつてマルクスを説きあかざりき

このひとときとはに思へとノートのはしに記してありぬ何時の日の事ぞ

馬車馬の疲れて倒れ行くさまを吾は見てをり話所の中に

わづかなる日かげに食事する見れば黒き飯に水かけて食ふ

バルコンに二人なりにきおのづから会話は或るものを警戒しつつ

たちまちに君の姿を霧とさし或る楽章をわれは思ひき

国防服着よとし言へば吾ら着つうなじ寒むがる老人社員ら

鍵かけて一人し思ふつづまりに額の硝子にくちびるを押す

凍死せる苦力は昼迄に埋められて今日もありきただ枯色の窓の中

霧の中行けばいつよりか寄りそひて私かに重たさを吾感じをり

あらはなるうなじに流れ雪ふればささやき告ぐる妹の如しと

手を垂れてキスを待ち居し表情の幼きを恋ひ別れ来りぬ

傍^{かたわら}にねむりたるるとき頸筋にはかなきまでに脈うちて居き

貼られ来るかそかなる青き切手さへ何にたとへて愛^{かな}しと言はむ

果てしなき彼方^{かなた}に向ひて手旗うつ万葉集をうち止まぬかも

宗教を教養とせぬ世に育ち戦ひ行けば何信じけむ

私物いくつ捨てて命令を待てるるとき妻は日食を見よと言ひ来ぬ

髪切りて幼き妻よ衛兵交代の列のうしろを行きかへれかし

吾は吾一人の行きつきし解釈にこの戦ひの中に死ぬべし

ポケットを弛^なませ重き認識票ありよはひ後れて兵となる日に

『吾ら兵なりし日に』

丈高きことがここにも目立ちつつありありて良き兵の一人とならむ

濃^あの如なほまとふもの兵の中に「眼鏡」と吾の名指さるるとき

少年の眼をして巴里^{パリ}を行きしといふナチスの兵を思ふ何ゆるゑ

まさびしき夢精をしたりうつしみは稚なき兵に並び覚めつつ

いつの間に夜の省線にはられたる軍のガリ版を青年が剝ぐ

世をあげし思想の中にまもり来て今こそ戦争を憎む心よ

夕ぐれは焼けたる階に人ありて硝子の屑を捨て落すかな

売れ残る夕刊の上石置けり雨の匂ひの立つ宵にして

『埃吹く街』

水銀の如き光に海見えてレインコートを着る部屋の中

言葉知らず働き合はばはかなきに出でて共産党宣言を買ふ

つましく米残す妻つきつめし餓は吾らに来じとぞ思ふ

生き行くは楽しと歌ひ去りながら幕下りたれば湧く涙かも

手をつなぎ窓に近づく幼児にチウインガムか何かを投ぐる

つづまりは科学の教養に立つ自己^{みづか}を恃みとなして対はむとする

つましき保身をいつか性^{さが}として永き平和の民となるべし

いち早く傍観者の位置に立つ性^{さが}に身をまもり来ぬ十幾年か

耳のうら接吻すれば匂ひたる少女なりしより過ぎし十年

枯草の夕日に立てり子を産まぬ体の線の何かさびしく

誠実に生きむとしたる狭き四囲技術家なれば生きる道ありき

漠然と恐怖の彼方にあるものを或いは素直に未来とも言ふ

言ひ切りて民衆の側に立つと言ふ君もつづまりに信じては居す

民衆とも或いは吾らとも言ひかへて浮き上りたる言葉のみなり

耐へて来し過ぎし七年いつの日にも少女の如く装はしめき

傍観を良心として生きし日々青春と呼ぶときもなかりき

『静かなる意志』

戦争の時に何して生きて来しきたなき自我を互ひに曝す

手術して見よと言はれて泣きて居る妻よ寝巻にオーバーを着て

吾が前に靴に紙幣をしまひたる少女は去りぬ日食の街

みづからの未来を選ぶ民の意志とこの静かさは涙出づるに

みづからの行為はすでに逃る無し行きて名を記す平和宣言に

牡蠣の如もだせるものはたれたれか聴くいつの日も生きよ彼らは

性愛のかぎりの事も知らざれば長かりし日を二人生き来ぬ

離脱せむ苦しきも今日君は告げ売れざる暗き絵を置きて行く

プラカード伏せて守られて行く列に吾が血は引きて屋上にあり

山のアジト追はれて移る学生も喜劇の如く伝へ言ふのみ

電気椅子にすでに終りしいのち二つ関りもなき吾がたかぶりに

哨戒機常なくめぐる夜ふかくヴェロニカの絵を額にをさむる

ただひとり吾の一生を知れるもの寂しきまでに吾は名を呼ぶ

遊園をときす夜ごとのオルゴール降り行く雨に長くきこゆる

春となる夜毎の雨よ降り濡れて木の芽はみどりのともしびの如

みな稚なく腕くみ暴力に對う声その幾千を照す雨の灯

『歴史』

『冬の銀河』

『喚声』

次つぎに警棒の下血に染まる彼ら戦いを知らぬ青春

犠牲死の一人の少女を伝え腕くみ涙ぐみ夜半に湧く歌

蝶を追う少女よ給油を待つしばし菊に似て澄むシベリヤの野花

青々と雪しずむごと街の白夜遠く来りき遂に知らぬ国

すがすがと風に洗われし骨のごと残る墓標よ来てこけし埋む

赤泥の如く沈める霧のかたニューヨークあり幾億の灯に

森くらくからまる網を逃れのがれひとつまぼろしの吾の黒豹

処刑待つ少年兵にしてまなご澄む忘れて寝ねん過ぎてゆく死は

一生吾に死者との対話かかる夜を雨の軍靴のまぼろしが行く

アカンサスおこせばすがる蝶のむれ一夜の嵐青々と降る

歴史とはかかる愚かさの日々の事実スクラムに濡れさけぶ女子生ら

もし吾ならば彼の学生群のごとくせむ告げしことばはかえる幾重にも

階級のままの墓標の立つかぎり草澄む秋の国遠く来つ

手をとりにて火の戦場をのがれ合うまぼろし一生愛と呼ぶもの

一人の死つたえて終る革命に吾は何を知る生きて知ること

梅雨暑き一夜を会いつ死刑宣告ありと知るのみの金芝河のこと

『異邦者』

『黒豹』

『遠く夏めぐりて』

『アカンサス月光』

ベトナム戦かく終る日を見ていしや予見といえるつねのむなしさを

獄死せる遠きひとりのための集いまれにみな逢えば老い残ること

力つくしドームを築く激情を古代と言えり亡べば知らず

『樹々のしぐれ』

刑務所に入ると別れのために来ぬ今日素直なる若者として

サラダの皿今朝春蘭の花添えて雪やむひかりカーテンを透く

『聖夜の列』

アクロポリス街を隔てて影白く未明の雨のつねに海より

若き日の母に返りし死顔のかく透きて人の苦しきは過ぐ

『折念に』

手を置きて死は静かなる今の面輪長く世にありし母と子にして

たずね来りて今日長城の雪に遭う雪に影つたう幾重もの尾根

『磔刑』

長江か黄河か知らぬわずかひかり機窓に昏れてとき長かりし

八月六日今日の黙禱に来て交る四十幾年の平和重たく

『宮為』

若者らダイ・インに入る日のさかりやさしきものら行為をば継ぐ

百歳の師を喪える寂寞を沁みて知らむに七十七歳の老い

『風のとよみ』

無宗教の式のま流さるるありし日のみ歌はありて世の別れなす

クーデターの幾夜自壞の兆しゆくを遠く眠らむモスクワは驟雨

『希求』

茫茫とかの日のマルキシズム幻想のすべて虚しきか虚しとはせず

杖に来る戦没者墓苑の春今年咲き澄むさくら散る前にして

『メタセコイアの庭』

相庇ういのち互みに年経るに門に水打ちてかかる半月

*歌中の「満洲」は中国東北部を指します。

歌の表記・ふり仮名は歌集に準拠しています。

『早春歌』から『メタセコイアの庭』に至る十九冊の歌集を二日ばかりで読み返した。読後の印象として最も強く残るのは、愚直なまでに変らぬ一貫した姿勢、平安で静かな理想世界を果てしなく希求する求道者としての歌人、近藤芳美の姿である。

一兵士として赴いた中国大陸での戦争体験、それは近藤芳美のうたの原点ともいえるもので、終戦後まもなく刊行された戦後短歌に新生の風をもたらした『早春歌』や『埃吹く街』に収められたうたは、戦中から戦後にかけての激動期の青春

がみずみずしい感性でとらえられた作品群だ。命あつて戦場から戻り、生き残った者のなさねばならぬ行為としての短歌。近藤芳美の作品に底ごもる重く沈痛な声の響きは、そうした生きて還らなかつた多くの人々の思いや嘆きを代弁しているのかもしれない。

歴史の流れに翻弄される個、その中で吐かれる一人の人間としての真実の声、近藤芳美の短歌を私はそんなふうを受けとめている。

道浦母都子（みちうら・もとこ）「未来」編集委員